都市経営　No.9（2016），pp.35-51

社会理論と事例研究の間で「生の技法を分析する」
──「ボランティア」とワークキャンプ──

山　口　健　一

要旨

本稿は，唐桑キャンプを事例に，「ボランティア」とワークキャンプとの相違を考察する．またその考察を通じて，社会理論と事例研究の間で「生の技法を分析する」ことの意義を指摘する．分析視角と方法として，A.ストラウスの相互行為論とグラウンデッド・セオリー法を用いた．事例の検討の結果，以下のことが明らかになった．

唐桑キャンプにみるワークキャンプは，NPOや企業の社会的責任などの活動が主流となった「ボランティアの終焉」後の現在においても存続する，「ボランティア」活動である．ただしそれは，偽善や自己満足といった批判を受ける〈贈与のパラドックス〉がむき出しになる官僚制的組織を有する「ボランティア」とは異なり，現地の人びとと参加者が〈つながり〉を形成・展開し，かつ現地の共同体的特質を活用して〈贈与のパラドックス〉に対処する活動である．

本事例研究から浮かび上がるのは，人びとの「生」は事例における相互行為と社会的世界に着目して把握される点であり，人びとの「技法」は事例に表れる複数の社会理論の特殊な結びつきの中で実践される点である．そのため事例研究において「生の技法を分析する」ことの意義とは，事例に特有の諸条件下における人びとの生きられた経験の物語を，類似の主題を抱える他者に理解・応用可能な実践の形式で提示することである．

キーワード：「ボランティア」，ワークキャンプ，生の技法，グラウンデッド・セオリー法，相互行為論

1　序論

1.1　本稿の課題

シンボリック相互行為論は，人びとが意味に生き相互行為する経験的世界を調査するための分析視角と方法を提供する．筆者がこれまで研究してきたA.ストラウスの相互行為論についていえば，調査上の基本的着想となる哲学的・存在論的前提を述べた分析視角（Strauss 1993）や，データからの仮説形成（理論産出）に重点をおくグラウンデッド・セオリー法が挙げられる（水野2005；Strauss & Corbin 1998=2004, 2008=2012）．

本稿では，シンボリック相互行為論に限らず何らかの分析視角や方法を用いて，現実社会の調査や分析から生み出された理論を社会理論と呼ぶことにしよう．それは，何らかの社会を対象にその理論的特徴を考察したものであり，その社会を説明するとともに新たな課題を導き出したり，その社会に属する諸事例を分析する際の基本的知識を与えたりする(1)．

本稿の課題は，シンボリック相互行為論の視角と方法を用いた事例研究において「生の技法を分析する」ことの意義を，社会理論との関連において考察することにある．筆者がこれまでグラウンデッド・セオリー法を用いて質的調査を実施してきたFIWC（Friends International Work Camp）の災害ワークキャンプの事例（山口2015a，2015b）と，それを包摂する領域をなす「ボランティア」の社会理論とを

比較することにより，この課題を検討したい．なお，社会理論における「ボランティア」と実際の活動や参加者をさすボランティアとを区別するために，前者を「」で括って表記する．

1.2 「ボランティア」の社会理論

グラウンデッド・セオリー法を用いて，インタビューや膨大な文書資料をもとに日本社会の「ボランティア」言説の変遷をたどった研究に仁平（2011）がある．それは，明治時代から現在に至る日本社会を対象に「ボランティア」の誕生と終焉を理論的に考察した，「ボランティア」の社会理論である[(2)]．また仁平（2011）の理論や知見は，包括的で統合されているという点で，今後のボランティア研究の参照点となるものであろう．それらの理由から彼の社会理論を主にとりあげ，特にその理論的中心をなす〈贈与のパラドックス〉に着目しよう．なぜなら本稿で扱う事例にも〈贈与のパラドックス〉が表れていたからである．

仁平によれば，第二次世界大戦後に誕生した，担い手の自発性，担い手と対象者の対称な関係，民主化への寄与を特徴とする「ボランティア」は，1980年代に，担い手の自己実現や自己成長，活動の「楽しさ」が強調されるとともに，担い手と対象者の間で〈交換〉（ウィン・ウィンゲーム）を成立させるものとなった．1990年代に「ボランティア」は隆盛期を迎えたが，〈交換〉を核に据えた「互酬性」をその中心的概念としたため，汎用性が高まると同時に空虚な記号となり終焉を迎えた．2000年代には具体的な対象者へのケア倫理という視点が生まれたが，現在は，より〈交換〉に適したNPOや社会的企業，企業の社会的責任などが言説領域の中心となり，「ボランティア」は無償労働の需給と担い手の教育が交差する限定的なものとなっていった（仁平2011：410-413，416-420）．

仁平によれば，「ボランティア」は〈交換〉を目指しつつも〈贈与〉を抹消しきれないという．〈贈与〉とは，物質的なものであれ精神的なものであれ，「他者のため」と外部から解釈される行為の表象である．一定の時間の流れの中で，与え手の〈贈与〉は，受け手に負債を生み，受け手の反対贈与（返礼）を経て，〈交換〉へ帰結する．そのため〈贈与〉は，〈交換〉に至るまでの間，与え手と受け手の間に上位-下位の関係を生起させる．「ボランティア」は，〈贈与〉をめぐる人びとの解釈ゲームを作動させやすいため，絶えず外部観察によって受け手や社会に対して偽善的な，反贈与的なものという批判にさらされる．仁平はこれを〈贈与のパラドックス〉と呼んでいる（仁平2011：11-14，420）．

1.3 FIWCとワークキャンプの概要

本稿で着目するFIWCとは，関東，東海，関西，広島，九州に各委員会を有する，ワークキャンプを実践するNGOである．メンバーの多くが大学生を中心とした若者たちであり，活動費を払い無償で自発的に参加する．ワークキャンプとは，参加者（以下キャンパーとも表記）が，特定の地域で一定の期間にわたり「（共同生活としての）キャンプ」を営みながら現地の人びとと共に環境や文化の保護，福祉，農村開発，震災復興などの「ワーク」に取り組む活動である．その特徴は，一言でいえば，「楽しさ」を重視した祝祭的なものであり，ワークキャンプを通じた参加者と現地の人びととの人称的で親密な共同性（本稿でいう〈つながり〉）の拡大を通じて，社会変革を目指すものである．それは，人称的な現地の人びとに合わせた個別なケアを実施するものであると同時に，若者たちの人間形成に寄与する教育効果を有している（西尾ほか2015）．

ここでFIWCのワークキャンプが，仁平（2011：410-412）が指摘する現在の「ボランティア」の特徴（担い手の自発性，互いが人称的な関係であるという点での担い手と対象者の対称な関係，具体的な対象者へのケアの倫理，活動の楽しさ，無償労働の需給，教育的効果）に，おおよそすべて当てはまることを確認しておきたい．つまりFIWCのワークキャンプは，終焉後の時代における「ボランティア」活動に位置づけることができる．

そのなかでも本稿は，東日本大震災における唐桑キャンプに着目する．それは，宮城県気仙沼市唐桑

町において2011年３月末から約１年間実施され，日本全国から206名が参加した[3]．唐桑の人びとによれば，唐桑町には，外部者に対して心を開きにくいが一度親密になると強い関係が形成される，「奥州独特の閉鎖的な風土」があるという．キャンプ参加者は，唐桑町内にプレハブ小屋を設営し共同生活を営みながら，①唐桑の人びとに対するニーズ調査や状況の下見，②ワーク内容の検討と決定を行うミーティング，③ワークの実施，④感想や課題の提示と反省を行うミーティング，という活動のセットを重層的に繰り返した．キャンパーたちは，キャンパー同士で〈つながり〉を形成し，また唐桑の人びととも〈つながり〉を形成することにより彼ら／彼女らの信頼を得てワークを実施した．それと同時にキャンパーたちは，唐桑の人びととの親密な〈つながり〉を形成することにより彼ら／彼女らを元気づけようとした．活動時期により異なるもののワーク内容には，津波の被害を受けた住宅における瓦礫の撤去や家屋内の片づけといった物質的なものと，避難所や仮設住宅への訪問や祭りの企画実施，子どもと遊ぶといった精神的なものの2種類があった．いずれの場合であれ，キャンパーたちは〈つながり〉を通じた現地の人びとのエンパワーメント（震災後に生きる力をつけること）を目的としていた（山口2015a：137-167）．

なお，ここでいう〈つながり〉とは，互いに社会的属性を表象する関係ではなく，互いにパーソナルなアイデンティティを表象しつつ累積的に発展する「対面的相互行為における個人間の親密で人称的／人格的な関係」（山口2015a：166）を指している[4]．

1.4　分析視角と方法

分析視角として本稿は，シンボリック相互行為論の中でもストラウスの社会的世界論を採用する．それは，人びとが生きる意味の世界がどのような特徴を持つのかを明らかにする．社会的世界とは，人びとが相互行為においてシンボルを「共有」し共同的活動を行う範囲である．その外部は象徴的世界に覆われており，その住人たちは，自らの世界に関連する他の諸世界との差異化を通じて，自らの世界の正当性を形成する．それらは，相互行為における諸シンボルへの着目により分析することができる（Strauss 1993）．

また本稿は，方法として事例研究に適するように修正したグラウンデッド・セオリー法を採用する[5]．主にストラウス＆J.コービン（1998＝2004，2008=2012）に依拠しつつ，本稿の課題と唐桑キャンプの事例に限定した理論的飽和を設定した[6]．本稿は，ボランティアとワークキャンプという具体的領域における事例研究である[7]．使用するデータは，筆者が実際に唐桑キャンプに参加した際の経験とフィールドノーツ，筆者が実施した唐桑キャンプのキャンパー37名への半構造化されたインタビューである[8]（表１）．なお，このデータにおけるキャンパーの語りは，筆者の質問（外部観察）に対する回答であるため，その意味において〈贈与のパラドックス〉に対する対応を程度の差はあれ含んでいる．

大まかな質問項目は，「FIWCや唐桑キャンプに参加する経緯」「唐桑キャンプの活動や理念」「現代日本社会に対して思うこと」である（詳細の項目は割愛する）．手順としては，①それらの質問項目にそってデータのオープンコード化を行い，②その中でも本稿の課題に関連する「唐桑キャンプの活動や理念」と「現代日本社会に対して思うこと」に着目し，その下位カテゴリーをなす「他ボランティア団体と唐桑キャンプの異同」「ボラティアイメージと唐桑キャンプの異同」「他の諸活動と唐桑キャンプの異同」「キャンパーと唐桑の人びととの交流」「外部者とつながり」のデータをさらにカテゴリー化した．③唐桑キャンプの目的である「〈つながり〉を通じた現地の人びとのエンパワーメント」を軸足コードとしつつ，本稿の課題の観点からそれらのカテゴリーの論理的関係付けを行った．④データから浮上した重要な概念を〈 〉で括って表記した．⑤キャンパーによる事実確認を行った．

視角と方法を踏まえて言い換えると，本稿の課題は次のようになる．本稿は，唐桑キャンプを社会的世界と捉え，〈贈与のパラドックス〉を鍵概念とし

つつ，象徴的世界におけるワークキャンプに関連するボランティアの諸世界との差異化（２節）と，その差異化を通じて形成される唐桑キャンプの世界の正当性（３節）とその実践（４節）を，質的データをもとに描き出す．それらを通じて「ボランティア」とワークキャンプの異同（５節１項）を述べるとともに，そこからわかる社会理論と事例研究との関係（５節２項）を考察したい．

2　キャンパーからみたボランティア観

2.1　〈派遣型ボランティア活動〉

気仙沼市や唐桑町では，いくつかの震災ボランティア団体が活動を行っていた．それらは唐桑キャンプと比べた場合，〈派遣型ボランティア活動〉と特徴づけることができる．

常駐するボランティア団体に所属する一部の長期滞在者を除く多くの参加者は，普段何らかの職業を有する社会人であった．彼ら／彼女らは週末の休みなどを利用するため，２-４日間程度滞在し活動を行った．作業場所から遠いところに宿泊する拠点があり，彼ら／彼女らはそこから作業を行うために現場へと向かっていた（LM，LG①）．

2.1.1　社会人の〈派遣型ボランティア活動〉

社会人が参加する〈派遣型ボランティア活動〉の

表１　唐桑キャンプインタビュー対象者一覧　　出典：筆者作成

表記	年齢	性別	滞在期間	職業	所属組織(OB・OG含む)	インタビュー実施日
LA	20歳代	男性	長期	会社員（休職）	Qiao	2012年8月30日
LB	30歳代	男性	長期	自営業	FIWC関東	2012年8月2日
LC	10歳代	女性	長期	大学生	FIWC関西	2012年1月22日
LD	20歳代	女性	長期	大学生	Qiao	2012年7月27日
LE	20歳代	女性	長期	大学生	FIWC東海	2012年3月5日
LF	20歳代	男性	長期	フリーター	FIWC東海	2012年6月17日
LG	20歳代	男性	長期	大学生	個人	①2012年1月27日 ②2012年8月5日
LH	20歳代	女性	長期	大学生	FIWC東海	2012年3月9日
LI	20歳代	男性	長期	フリーター	Qiao	2012年9月4日
LJ	20歳代	女性	長期	フリーター	FIWC関東	2012年7月23日
LK	20歳代	男性	長期	大学生	Qiao	2012年8月1日
LL	20歳代	女性	長期	自由業	個人	2012年7月26日
LM	30歳代	男性	長期	会社員(休職)	個人	2012年7月27日
MA	20歳代	女性	中期	大学生	FIWC東海	2012年3月7日
MB	20歳代	女性	中期	大学生	Qiao	2012年8月1日
MC	20歳代	女性	中期	転職中	FIWC関東	2012年3月2日
MD	20歳代	男性	中期	大学生	個人(他団体から)	2012年7月31日
ME	20歳代	男性	中期	大学生	FIWC関西	2012年1月20日
SA	60歳代	男性	短期	無職	FIWC関西	2012年2月12日
SB	40歳代	男性	短期	団体職員	FIWC関西	2012年7月6日
SC	20歳代	女性	短期	大学生	FIWC関西	2012年7月1日
SD	20歳代	男性	短期	大学生	FIWC東海	2012年3月11日
SE	10歳代	女性	短期	大学生	FIWC東海	2012年3月9日
SF	20歳代	男性	短期	飲食業	Qiao	2012年2月17日
SG	20歳代	男性	短期	大学生	FIWC東海	2012年3月10日
SH	20歳代	女性	短期	大学生	FIWC東海	2012年3月8日
SI	20歳代	男性	短期	大学生	FIWC東海	2012年3月11日
SJ	20歳代	男性	短期	大学生	FIWC関西・FIWC関東	2012年1月21日
SK	20歳代	女性	短期	大学生	FIWC九州	2012年7月8日
SL	20歳代	男性	短期	大学生	FIWC九州	2012年7月8日
SM	20歳代	女性	短期	大学生	FIWC九州	2012年7月7日
SN	20歳代	女性	短期	大学生	FIWC九州	2012年7月7日
SO	20歳代	男性	短期	大学生	FIWC九州	2012年7月7日
SP	20歳代	女性	短期	大学生	FIWC九州	2012年7月8日
SQ	20歳代	女性	短期	会社員	FIWC関東	2012年8月1日
SR	20歳代	男性	短期	大学生	Qiao	2012年8月2日
SS	10歳代	女性	短期	大学生	個人	2012年7月31日

特徴について，SC氏は「［ある団体は］『私たちは兵隊だ』っていうモットーみたいなものを持っていたらしくて，ただただ瓦礫を運んで処理して［いた］」と語る．またSP氏はいう．

> さまざまな人たちの受け入れの中で，大きい団体だったので．その中での関係が，全然知らない人との関わりだったので．…もう１日２日で帰るよ，っていう人たちだったので．結構，ほんと，もう来てすぐ帰るっていう感じで．［参加者は］関係づくりもできないって思ってるのかな（SP）．

これらの語りから，社会人の〈派遣型ボランティア活動〉は，長期滞在者を核としつつ短期滞在の参加者を多く受け入れ，作業のみを目的としていることがわかる．それは，参加者同士や参加者と現地の人びととの「関係づくり」の機会と時間がほとんどなく，互いに匿名的な関係を形成していたと考えられる．

2.1.2　大学生の〈派遣型ボランティア活動〉

〈派遣型ボランティア活動〉には大学生を対象としたものもあった．それは，大学教員や団体の人の引率のもと多くの参加者を受け入れ，参加者は１-２週間程度滞在し活動を行った．そうした団体は――社会人の〈派遣型ボランティア活動〉と異なり――その滞在期間が終わると被災地から撤退した（LK，ME，SC）．

学生が参加する〈派遣型ボランティア活動〉の特徴について，ME氏は「ツアー［ほど］じゃないですけど……やっぱり行動とかも団体で行動ですし…行動が自由にできない」と語り，そのタイプの団体に参加した経験のあるMD氏は「やることが決まっていて…何も考えずにできる」と語る．またLF氏はいう．

> ［参加者たちの間で］お互いなんのために作業しているのかっていう確認・反省ができてなかった．主体性のない，先生から引率された［状態］…っていうのが起きていたような気がします（LF）．

これらの語りから，学生の〈派遣型ボランティア活動〉では，引率者の指示のもと，活動内容が定められており，参加者たちはそれに従うことが求められていることがわかる．参加者たちは「ツアー」のような団体行動を求められており，個々人の主体的な行動や意見をいう機会が制限されていた．

また学生の〈派遣型ボランティア活動〉では，参加者と現地の人びととの間にほとんど交流がなかった．この点について，SO氏は「作業の時間以外は，［宿泊の拠点である］決まった体育館で過ごしたりとか，現地の人と交流があんまりとれていないような……内輪で固まっている感じがあった」と語り，そのタイプの団体に参加した経験のあるMD氏は「あんまり……地元の人と話す機会がなかった」と語る．両者の語りから次のことがわかる．学生の〈派遣型ボランティア活動〉では，参加者は作業時に現地の人びとと交流する機会がほとんどなく，それ以外の時間は宿泊拠点に滞在しつつ，参加者同士の交流を行っていた．

2.1.3　自治体主導の〈派遣型ボランティア活動〉

さらに，市などの自治体が主導して〈派遣型ボランティア活動〉の斡旋や支援も実施された．唐桑キャンプと比較しつつ，SF氏とME氏はこれについて次のように語る．

> 集合的なボランティア［として］入ったら，そういう［人称的で親密な］関係が築かれないまま，はい…終わりです，次の人入ってくださいという風になっちゃうんですね．結構，今回のボランティアは．特に自治体が募集したやつなんかは特にそうだったと思うんですけど（SF）．

> どうしても［自治体主導の］災害ボランティアセンターとかって，［被災者たちが］ニーズを持ってきて，それに対してアプローチをかけ

ていくんで．その，当事者を介さないこともありましたけど（ME）．

SF氏の語りが示すのは，自治体主導の災害ボランティアセンターによる斡旋や支援もまた，作業のみを目的とし，それが終われば活動を終了する〈派遣型ボランティア活動〉を対象とした点である．その場合，参加者同士であれ，参加者と現地の人びととの間であれ，人称的で親密な〈つながり〉を築くことが非常に難しいものであった．またME氏によれば，自治体主導の災害ボランティアセンターは，被災者たちが申請したニーズに対してのみボランティア活動の斡旋をするものであり，参加者と被災者との間に交流が生じない場合があった．

つまり，社会人や大学生のそれであれ，あるいは行政主導のものであれ，〈派遣型ボランティア活動〉は，２日から２週間程度の短期滞在者が参加し，作業場所から離れた拠点で宿泊し，作業の実施を目的としていた．指示を行う引率者や長期滞在者と短期滞在の参加者との間には，上位下達の関係があり，参加者は主体的な言動や意見をいう機会を制限されていた．その統制下において，参加者は，現地の人びとと交流を図る機会がほとんどなかった．それは，唐桑キャンプと比べて（統制下で作業のみを重視することから）「兵隊みたい」，（自由が制限されることから）「ツアー」と形容されるものであった．

とはいえここで補足しておきたいのは，キャンパーたちは，〈派遣型ボランティア活動〉に唐桑キャンプと異なる意義を与えていた点である．ME氏が「学生がいっぱいいますし…そっち［上意下達の関係］の方が効率的だとは思う」，「［作業において］マンパワーの供給をすごいできている」と語るように，それは，瓦礫撤去等の作業目的からいえば合理的かつ効率的であった．また，比較的小人数の唐桑キャンプが担えない作業の場合には，LI氏が「［〈派遣型ボランティア活動〉のある団体は］重機だのなんだのっていろいろ持ってて…助けていただきました」と語るように，両者は互いに協力しあう関係にあった．

2.2　〈震災ボランティアのイメージ〉

キャンパーたちは，具体的な震災ボランティア活動への評価のほかにも，日本社会における〈震災ボランティアのイメージ〉を有していた．

一つは，マスメディアの報道におけるものである．ME氏は「災害ボランティアの情報とかテレビで流れていたじゃないですか，そういうのを見てたら…秩序立てているというか，統制がとれているような感じ」として〈震災ボランティア〉をとらえていた．それは「災害救援ボランティア団体が，朝何時に起きて，何時から集会があって，装備して，ばっと出て行って…それぐらい固いような…仕事をこなすだけっていうイメージ」（ME）であった．またSG氏は，マスメディアが「［震災］ボランティアを，あの，聖人みたいに…あまりにもそういう…完全な人みたいに作りすぎている風潮が強い」と語る．つまりマスメディアによる〈震災ボランティアのイメージ〉は，聖人のような欠点のない善人たちが，秩序立てられた統制のある組織の中で，作業のみをこなすものであった．

もう一つはキャンパーが有するものである．例えば，SS氏によれば「普通のボランティアは，行って，まあ，何か仕事をして帰るっていうイメージ」であり，LM氏によれば〈震災ボランティア〉は「みんなストイックに…何というかな，冗談とか飛ばしたりとかはしない…結構みんなまじめな人しかいない」ものであった．つまりキャンパーの〈震災ボランティアのイメージ〉は，マスメディア報道におけるそれと類似した，まじめな人たちがストイックに作業をこなすものであった．

他には，〈震災ボランティアのイメージ〉において贈与性を指摘する語りもみられた．例えばMA氏は「ボランティアっていうと，やっぱりこう何かをしてあげるっていうイメージになる」という．これは，キャンパーにとってそのイメージが〈贈与のパラドックス〉を喚起させることの一例証であろう．さらには〈贈与のパラドックス〉自体を指す語りも見られた．その一つは先述したマスメディアが「［震災］ボランティアを…聖人みたいに…作りすぎている」（SG）という語りであり，別の一つはよ

り明確なLA氏の次の語りである．

> ボランティアっていうのが，［被災者の］自立の妨げになるリスクを背負っているんだっていうのを，［人びとに］知ってほしかった．ボランティア，イコール，すべてが素晴らしい，っていうそんな甘いものじゃありませんよっていう…自分たちがやりたいから…といって［ボランティアが］来て．で，地元の人もノーと言えないんで．ありがとうって引きつった顔でいう，みたいな（LA）．

LA氏の語りは，すべて素晴らしい，善いものという〈震災ボランティアのイメージ〉を示している．それに対しLA氏は，ボランティア活動には，参加者が被災者の状況を顧みず，被災者の自立の妨げや被災者たちに徒労を与える危険性を指摘している．

これらの語りが示すのは，〈震災ボランティアのイメージ〉とそこに付随する〈贈与のパラドックス〉である．すなわち，聖人のようなまじめで欠点のない善人たちが，秩序立ち統制された組織の中で，（冗談も言わず）ストイックに作業のみをこなす．しかしそれは，現地の人びとが置かれた状況を顧みず善意の贈与を行うことで，被災者の自立を妨げたり，被災者に徒労を与えたりする〈贈与のパラドックス〉を伴うものであった．

3　キャンパーからみた唐桑キャンプ

では次に，〈派遣型ボランティア活動〉や〈震災ボランティアのイメージ〉と比較しつつ，唐桑キャンプという社会的世界の特徴を浮き上がらせることにしたい．

唐桑キャンプは，〈派遣型ボランティア活動〉と異なりキャンパーの自由な行動を許容する組織形態がとられていた．LF氏は「ある程度自由な行動というか，FI［WC］の場合は，［ワークの時間帯などは］一応団体行動だけど，空いている時間は個人で動いていいよ，っていうのがある」と語る．すなわち，唐桑キャンプでは，ワーク時には集団的な行動が求められるが，それ以外の場面では個人が自由に行動することが可能であった．加えて，学生の〈派遣型〉団体の経験を有するMD氏は次のように語る．

> ［唐桑キャンプは］まず自分で考えて，自分が何をしたいのか，自分が何を思っているのかによって，その，大きく…ワークが変わる組織だなっていうのはすごい感じました．…自由度が違いますね．あと責任も多分違うと思いますね．…FIWCは自由度があるので，自分で責任をもってやらなきゃいけない（MD）．

MD氏の語りが示すのは，唐桑キャンプでは，ミーティングにおいて，キャンパー個々人のワークに対する意見をいう機会が与えられ，それらが結果的に実際のワークに反映されうる点である．加えてMD氏の語りは，その自由裁量が，実際のワークに対する責任を伴う点を指摘している．つまり，唐桑キャンプは，ワーク以外の場面における個々人の自由行動の裁量と，ミーティングにおけるワーク内容への自由な発言の裁量と責任とを，キャンパー個々人に与えるものであった．そのためSJ氏は，〈派遣型ボランティア活動〉と比べて「自発性はFI［WC］の方が高い」と捉えていた．

加えて唐桑キャンプは，そうしたミーティングを通じて頻繁に情報共有がなされるために，〈派遣型ボランティア活動〉と異なり，滞在期間の長短を問わずキャンパー間での活動の「引き継ぎ」がなされていた（SC）．

そのような組織的特徴を有する唐桑キャンプでは，キャンパーが自発的に〈つながり〉を形成することが容易であった．この点についてLC氏は「〔キャンパーが唐桑の〕人と同じ生活を…送るってことで，［お互いの］距離も縮まるし，個と個とのつながりが生まれやすい」と語り，またSP氏は「メンバー内での親密な関係をつくることも大事なんですけど，まわり［の唐桑の人びと］との関係を大事にしてた」と語る．そのためME氏は，〈派遣型ボラン

ティア活動〉と比べて「FI［WC］だと知り合う人の幅が広」いと捉えていた．

さらに，LM氏が「予想外に冗談とか飛ばしあったりしてて…ワーク中はないですけど」，LI氏が「なによりもみんながこう，楽しくやろうっていうのを第一に動いてた」と語るように，共同生活の場面では「楽しさ」を重視していた．〈震災ボランティアのイメージ〉と異なるこの「雰囲気のよさ」（LI）が，他の震災ボランティア団体と比べ「うちは…絶対これじゃ負けない」（LI）唐桑キャンプの長所と捉えられていた．

「楽しい雰囲気」の唐桑キャンプにおいて〈つながり〉は，〈派遣型ボランティア活動〉と異なり，キャンパー同士のみならずキャンパーと現地の人びととの間でも形成される．そしてそれは，唐桑の人びとのエンパワーメントへとつながった[9]．

> 私たちはちょっと時間があったりとかして，近くにそのお宅の人がいると，話しにいくんですよ．なるべくお話を聴けたら，なんていうかまあ，話したいなとか．ちょっとでも話すことで，向こうの気が楽になればいいなあと思うんです（MA）．

MA氏は，共同生活の場面においてキャンパーと唐桑の人びとが〈つながり〉を形成しつつ交流することで，唐桑の人びとへのエンパワーメントを生みだす点を指摘している．加えて唐桑キャンプのそうした活動形態は，唐桑の人びとに対する効果的なワークを生み出すものでもあった．SM氏は語る．

> FIだったら…融通が利く，フレキシブルに活動ができるのかな．現地の人から，こういうのがあればとか，こうしてほしいっていうのがあれば，すぐにそれを行動に移せるっていうのが，すごい強みかなと思います（SM）．

現地で共同生活を送りながら〈つながり〉を形成する唐桑キャンプでは，その〈つながり〉を通じて唐桑の人びとから直接ワークのニーズを得ることができた．そのニーズを，ミーティングで提案することにより，柔軟なワークを実施することが可能であった．つまりそれは，自治体主導の〈派遣型ボランティア活動〉支援と比べて「当事者ありきの活動で一緒にやっていく，復興に取り残されることがない」（ME）ものと捉えられていた．

唐桑キャンプはこのような特徴をもつので，SG氏によれば「すごいボランティアっていう言葉を嫌う人が多い」という．ここまでの考察を踏まえると，その理由は次のように考えられよう．聖人による善意とワークの贈与性が顕れる〈震災ボランティアのイメージ〉は，現地の人びとの状況を顧みないために生じるむき出しの〈贈与のパラドックス〉を伴っていた．それらが，〈つながり〉を形成し唐桑の人びとのニーズに柔軟に対応する唐桑キャンプに当てはまらない．にもかかわらず唐桑キャンプを「ボランティア」と一括りにされることから[10]，キャンパーがその言葉を嫌うのである．

しかしこのことは，唐桑キャンプが〈贈与のパラドックス〉を完全に回避していることを意味するわけではない．以下でみていくように，唐桑キャンプには，〈震災ボランティアのイメージ〉のものとは異なる〈贈与のパラドックス〉が伏在していた．次節では，唐桑キャンプにおける活動の互酬性をみていくことにより，それに特有の〈贈与のパラドックス〉とその対処方法を考察する．

4　唐桑キャンプにおける活動の互酬性

4.1　唐桑キャンプにおける〈贈与のパラドックス〉

唐桑キャンプにおける活動は，〈震災ボランティアのイメージ〉や〈派遣型ボランティア活動〉を含む「ボランティア」全般と同様，唐桑の人びとに対する贈与でもあった．SR氏がこの点について端的に述べる．

> 瓦礫撤去［ワーク］を通じて…［高齢の］住人が，キャンパーに対して感謝に似たような気持ちを持つ．そこで住人は，瓦礫が撤去された

っていう事実だけではなくて，…わざわざ学生主体のキャンパーが［それを行う］．きっと何か心に残ると思うんですよ．で，何かそこでつながることってあると思うんで（SR；傍点は筆者）．

SR氏は，唐桑の人びとが「感謝に似たような気持ち」をもつという，ワークの贈与性を指摘する．しかしその語りに続けてSR氏は，学生主体のワークキャンプの特性を指摘している．この特性の理解には西尾（2015）の議論が参考になる．西尾（2015：36-38）は，被災者の漁師と学生キャンパーとの関係を例に，ワークキャンプが及ぼす現地の人びとへのエンパワーメントを考察する．それは，ワークの贈与性が被災者に負債を生むため両者の間に「支配‐服従関係」が生まれるが，海に生きる漁師が青二才の学生に服従することは誇りが許さないため「対等な関係」（互酬性）に至ろうとする際に生じるという．この議論を踏まえるとSR氏が指摘する学生主体のワークキャンプの特性は，西尾（2015）のいう職業や肩書の相違ではない，年齢の相違により生じるエンパワーメントと解釈できる．すなわち，年下の学生主体のキャンパーによるワークの贈与により年上の唐桑の人びとに「感謝に似たような気持ち」としての負債が生じ，キャンパーと唐桑の人びとの間に上位－下位の関係が生まれる．しかしそれと年上の唐桑の人びとと年下のキャンパーという年齢構成上の上位－下位の関係(長幼の序)が矛盾するため，年上の唐桑の人びとはその矛盾を解消しようとする結果，彼ら／彼女らにエンパワーメントが生まれる．さらに両者の〈つながり〉は，そのプロセスを通じて形成・展開されていく．

一方で唐桑キャンプは，〈震災ボランティアのイメージ〉や〈派遣型ボランティア活動〉と異なり，活動を通じて〈つながり〉を形成するため，キャンパーが負債を有する唐桑の人びとから反対贈与を受ける機会を有していた．その一つとして先に触れた「感謝」や，いわゆる〈おもてなし〉が挙げられる．これらの点についてME氏は「すごい唐桑の方がよくしてくれるので，ご飯をだしてくださるとか，それを断るのも，それはそれで悪いことでもあるんですけど」と語る．またLE氏はいう．

ほんとにもう，めっちゃよくしてくれてるんで．自分たちに対して．やっぱり夜とか，そのう「ごはん食べにいこうや」とか「お酒飲みに行こうや」とか，そういうお誘いをすっごいくれるんです．…すごいありがたいです（LE）．

キャンパーとの〈つながり〉を通じて唐桑の人びとは，キャンパーに料理やお酒を振る舞う〈おもてなし〉を実施した．唐桑の人びとからの反対贈与は「すごいありがたい」（LE），「断るのも…悪いこと」（ME）であった．つまりこのとき，キャンパーと唐桑の人びととの間に互酬性が形成されている．

しかしながら，こうしたキャンパーと唐桑の人びととの関係には〈贈与のパラドックス〉が伏在していた．例えば，2011年７月と９月に計２週間程度唐桑キャンプに筆者が参加したとき，筆者は実施した活動の成果以上の〈おもてなし〉を受け，「私は唐桑の人びとに対して何もできていない」という負債感覚を有した．あるいは負債感覚を有するために，MA氏は「自己満足だったのかな」，ME氏は「ありがとうと言ってもらえるほどのことをしている実感がなかった」と語る．つまり，唐桑キャンプの活動と唐桑の人びとの「感謝」や〈おもてなし〉との互酬性は，キャンパーにとって〈贈与のパラドックス〉を顕在化させるものであった．では，唐桑キャンプはいかにそれに対処するのだろうか．

4.2　〈つながり〉を通じた活動の互酬性――二つの立場

唐桑キャンプでは，キャンパーと唐桑の人びととの間で互いの関係をめぐる緊張が生じていた．それは，キャンパーが唐桑の人びととの間で形成し展開する人称的な〈つながり〉と，その中でキャンパーの〈外部者の自覚〉に伴い両者の間に生起する，「被災者‐外部者」という他者性との間の〈緊張〉であった（山口2015b：185-189）．

唐桑キャンプの活動における〈贈与のパラドックス〉への対処法は，その〈緊張〉に対するキャンパーの態度の違いにより，大きく二つの形式に分かれていた．一つは「被災者‐外部者」関係を重視するものであり，もう一つは人称的な〈つながり〉を重視するものである．前者からみていこう．

4.2.1 「被災者‐外部者」関係における〈贈与のパラドックス〉の克服

何人かのキャンパーは，現地の人びととの〈つながり〉を自覚しつつも，そこに〈緊張〉を伴って現れる「被災者‐外部者」関係をより重視していた．この立場では，外部者による贈与と唐桑の人びとの反対贈与との間で生じる〈贈与のパラドックス〉が顕在化していた．この点についてLD氏はいう．

> 常に外部者だとおもっています．唐桑に行くっていうけれども，本当は居させてもらっている，入らせてもらっていると思うってるし，関わらせてもらっていると思っている．だから，うん，何か慣れちゃうと関係って，ちょっと失礼とかにもなったりすることがあるじゃないですか．でもそれはいけないなって，やっぱ外部者だし．…本当にそこは，やっぱ感謝と，そこに住んでいる人たちへの敬意っていうのは，うん，忘れちゃいけないって（LD）．

LD氏の語りが示すのは，唐桑の人びとと人称的で親密な〈つながり〉を形成しつつも，そこに〈外部者の自覚〉を伴うことの重要性である．LD氏にとって，〈つながり〉のみでは，被災者の境遇に立てないがゆえに被災者に「失礼」を与えてしまうという〈贈与のパラドックス〉を回避できなかった．〈贈与のパラドックス〉の不可避性を引き受けた結果LD氏は，唐桑キャンプでの活動が贈与ではなく負債を伴うものと捉えるに至った．すなわち，唐桑町に「居させてもらっている」「入らせてもらっている」という表現に表されるように，この立場は，キャンパーと唐桑の人びととの間に下位‐上位の関係を設定した．そのうえでLD氏は，唐桑の人びとへの「敬意」と「感謝」という反対贈与を自覚している．

こうしたキャンパーの負債感覚に伴う反対贈与としての活動は，唐桑の人びととの〈つながり〉やワークにも表れていた．ME氏は次のように語る．

> もともと畑の草刈をして，そこを耕す，また畑として使えるようにっていうことだったんで．耕すくらいまでやったんですけど．それも草刈だけじゃなくって，耕す方もやらせてもらって．それもやったことがなかったんで，そういう自分の経験にもなりましたし．あのー，いろいろなことをやらせていただいてるっていう環境がすごくうれしかったですね（ME）．

> ２週間ぐらいで［唐桑で出会った］おじいちゃんから，ワークをしていて，ほんと，孫のように思っているよ，家族のように思っているよ，いつでも来てほしいんだってことを言ってくださる（ME）．

前者の語りでは，「やらせていただいてる」という謙譲語の表現に見られるように，相手へのワークとその成果がME氏自身の人間的な成長に結びつくという点で，相手からの贈与に対する負債感覚をME氏が有していることがわかる．また後者の語りでは，「言ってくださる」という尊敬語の表現に見られるように，ワークを通じて生まれた唐桑で出会ったおじいちゃんとの親密な〈つながり〉の形成に対しても，相手からの贈与に対する負債感覚をME氏が有していることがわかる．これらに共通するのは，唐桑キャンプそれ自体が負債を伴うものであり，その反対贈与として活動を行うという視点である．また，先述した「ご飯を出してくださる」（ME）という尊敬語の表現にも明らかなように，〈おもてなし〉についてもキャンパーは負債感覚を有していた．

要するに，この立場は，被災者である唐桑の人びとからの贈与により負債を有する外部者のキャンパーが，反対贈与として活動を行うことにより，両者

の間の互酬性を形成しようとする．それが，人称的で親密な〈つながり〉よりも「被災者‐外部者」という他者性を重視したキャンパーにとっての，〈贈与のパラドックス〉の克服方法であった．

4.2.2　〈つながり〉による〈贈与のパラドックス〉の無化

別の何人かのキャンパーは，「被災者‐外部者」関係を自覚しつつも，人称的で親密な〈つながり〉と唐桑の人びとのエンパワーメントをより重視していた．この点についてLE氏は「私の方はもう親密になるっていう方が大きかったので，だからその関係を保つために，外部者でいようっていう考えはなかった」という．またMA氏は次のように語る．

> ［唐桑町は］すごく私にとっても大切な場だし，…仲良くなった人もいるから，すごい好きなんだけど…こう葛藤があって．…どこまで…［相手を］分かってあげれたのかなとか，自己満足だったのかなとか思いました．…何かその辺がこう，それでいいと思ったんですよ．つながりが作れて，楽しくって，お互いに大切な関係であればいいな（MA）．

MA氏は，唐桑の人びととの親密な〈つながり〉の中で，被災した唐桑の人びとの境遇や経験に対して分からないという〈外部者の自覚〉に至っている．MA氏はそのとき，「自己満足だったのかな」というように〈贈与のパラドックス〉を顕在化させている．しかし最終的にMA氏は，「それでいい」と語るように〈つながり〉を重視する立場に至った．

両者の語りが示すのは，キャンパーが〈外部者の自覚〉に至りつつも人称的で親密な〈つながり〉をより重視するがゆえに，「被災者‐外部者」関係に生起する〈贈与のパラドックス〉を無化する点である．要するにこの立場は，キャンパーと唐桑の人びとが贈与や交換を問わない（疑似）家族や友人であることを重視している．

しかし〈つながり〉を重視するこの立場は，特にキャンパーが〈外部者の自覚〉を伴わない場合，LD氏が危惧するような唐桑の人びとに迷惑をかける危険が生じた．例えば，「誰々さんのところのボランティアが迷惑をかけた」といったうわさ話が流れるといった，唐桑キャンプの活動における失敗が，キャンパーと親密な〈つながり〉を有する特定の唐桑の人の責任問題として表れることがあった（LB，LC）．この事態は〈贈与のパラドックス〉を顕在化させるだろう．LB氏は，こうした場合の対応について次のように語る．

> 問題があれば謝りに行くっていうふうにしていたので．…それこそ人と人のつながりだなあと僕は思うので．「すいませんでしたー」って謝りに行って，［相手が］「いや，実は怒っていないから［許す］」ってなったりするのがいいなあと（LB）．

LB氏の語りが示すのは，失敗などの問題的状況が発生した際，人称的で親密な〈つながり〉を紐帯とした「謝罪と許し」のやりとり（ウチとソト関係におけるウチの保持）により，その問題を収束させる点である．つまりこの立場は，問題的状況の場合においても，〈つながり〉を重視することにより〈贈与のパラドックス〉を無化しようとするのである．

5　結論

5.1　「ボランティア」とワークキャンプ――唐桑キャンプの社会的世界

ここまでは，キャンパーたちの語りに表れる，社会人／学生／自治体主導の〈派遣型ボランティア活動〉やマスメディアやキャンパーにおける〈震災ボランティアのイメージ〉といった外部の諸世界との差異化を通じて形成された，唐桑キャンプの社会的世界をみてきた．ここから，唐桑キャンプにみるワークキャンプの特徴を次のように分析できる（図1）．

〈派遣型ボランティア活動〉は，引率者のもと上意下達の組織を形成し，大人数で効率的な作業を行

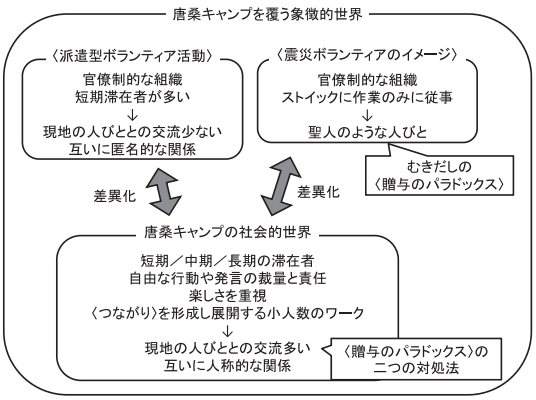

図１　唐桑キャンプにみるワークキャンプの特徴
出典：筆者作成

う一方で，現地の人びととボランティア参加者の間で交流の少ない匿名的な関係を形成した．これは，官僚制的組織をもつボランティア活動といえるだろう．一方〈震災ボランティアのイメージ〉では，震災ボランティアが秩序立ち統制された官僚制的組織であるのに加え，参加者がストイックに作業のみに従事する聖人のような人びとだと捉えられていた．そのためそのイメージには，外部観察により受け手や社会に偽善的な贈与と受け取られやすい，むき出しの〈贈与のパラドックス〉が伴っていた．

これに対し唐桑キャンプでは，自由な行動や発言の裁量と責任が与えられたミーティングを実施し，そこで決定された現地の人びとのニーズに柔軟に素早く対応する小人数のワークを通じて，楽しくキャンパーたちが現地の人びとと人称的で親密な〈つながり〉を形成する組織・活動形態を有していた．その〈つながり〉によりキャンパーたちは，現地の共同体的特質（長幼の序や〈おもてなし〉やウチとソト関係）を活用してワークキャンプを実施することができた．つまり，このワークキャンプの組織・活動形態こそ，唐桑キャンプが官僚制的組織をもつ〈派遣型ボランティア活動〉や〈震災ボランティアのイメージ〉と差異化する根拠であった．加えてそのワークキャンプでは，キャンパーたちが〈つながり〉を通じて現地の人びとから〈おもてなし〉などの反対贈与を受け両者の間で互酬性を形成できるため，匿名的な関係を形成する〈派遣型ボランティア活動〉や〈震災ボランティアのイメージ〉と比べ〈贈与のパラドックス〉が顕在化しにくかった．つまり，現地の人びととの交流が少なく匿名的な関係を形成する官僚制的組織をもつボランティア活動にはむき出しの〈贈与のパラドックス〉が付随しやすいために，キャンパーたちが「ボランティア」と括られることを嫌い，その言葉を嫌うことになったと考えられる．

とはいえ，唐桑キャンプは〈贈与のパラドックス〉を完全に回避しているのではなく，それを潜在的に保持していた点に注意しなければならない．そのため〈贈与のパラドックス〉は，現地の人びとからの反対贈与や，現地の人びととの関係における問題的状況の発生によって顕在化した．それらは，キャンパーたちが外部観察の視点を自らに当てはめることにより自覚された．唐桑キャンプはこの事態に対し二つの対処法を形成した．一つはキャンパーたちが，現地の人びととの間の「被災者－外部者」関係を重視し，ワークキャンプの存在それ自体を負債と捉え，反対贈与として活動を実施することにより〈贈与のパラドックス〉を克服する方法である．もう一つはキャンパーたちが，両者の間の人称的で親密な〈つながり〉を重視し，家族や友人として振る舞うことで〈贈与のパラドックス〉を無化する方法である．これらはいずれも，キャンパーと現地の人びとが親密な〈つながり〉を形成し現地の共同体的特質を活用する組織・活動形態から生まれたと考えられる．

以上のことから，1.3で指摘したFIWCのワークキャンプが仁平（2011）のいう「ボランティア」に位置づけられることを踏まえるならば，「ボランティア」と唐桑キャンプにみるワークキャンプとの違いについて次の点が指摘できる．ワークキャンプは，キャンパーたちが「ボランティア」という言葉を嫌うにもかかわらず，NPOや企業の社会的責任などの〈交換〉を基軸とする活動が主流になった現在においても存続する「ボランティア」活動である．ただしそれは，むき出しの〈贈与のパラドックス〉が付随しやすい官僚制的組織をもつ「ボランティ

ア」とは異なり，現地の人びととの〈つながり〉の形成と展開を重視し，現地の共同体的特質を活用する「ボランティア」活動なのである．

5.2　社会理論と事例研究の間で「生の技法を分析する」

最後に，「生の技法を分析する」ことの意義を，本稿の知見における社会理論と事例研究の関係から考察したい．その前に前提として次の二点を述べておこう．第一に，本稿はストラウスの分析視角と方法を通じてデータから事例を分析しているが，そのデータに表れる限りにおいて〈贈与のパラドックス〉や官僚制的組織（佐藤1994：231-233），あるいは長幼の序や〈おもてなし〉などの互酬性やウチとソト関係といった日本社会論の文化的構造（中根1967；阿部2001）をその説明に採用している（データの解釈には幅があるにせよ，データに表れない理論や概念を事例の分析に採用することは，「ベッドに合わせて足を切る」事態に他ならない）．第二に，本稿の分析はグラウンデッド・セオリー法にもとづく仮説形成（理論産出）のプロセスとして行われており，したがって事例は理論的に社会理論と関連づけられている（それは，いわゆる「統計的な一般化」による社会理論とそれとの関連で成り立つ「代表的」な事例という考えと異なる[11]．誤解を与えないためにも，これらの点を確認しておくことは重要である．

本稿において唐桑キャンプは，現代日本社会の「ボランティア」の一つであるワークキャンプの事例として分析された．本稿の事例研究と社会理論との関係は図２のようになる（円の大きさは検討事例外部への適用範囲を表している）．ここから両者の生産的な関係が大きく三点ほど挙げられるだろう．①事例は，社会理論に対する一つの検証ないし例証となり，他の事例との間で新たな共通点が発見された場合には社会理論を補足する．本稿は「ボランティア」とワークキャンプ双方の社会理論における例証であった．また例えばフィリピンでのワークキャンプが，現地の人びとの相互扶助慣行を活性化するという指摘がなされている（日下2015：125）．この指摘と本稿の知見から，ワークキャンプの社会理論に「現地の共同体的特質の活用」という特性を補足することができる．②事例は，それが社会理論の部分的であれ反証となる場合，その理論を修正する契機となる．本稿は，「ボランティア」とワークキャンプの社会理論を踏まえ，事例において官僚制的組織をもつ「ボランティア」とは異なるワークキャンプの特徴を明らかにした．現在，本事例以外にも行政の災害ボランティアセンターを経由したボランティア活動に対し，「行政組織に似た硬直性」（新2011：213）という官僚制的組織の問題が指摘されている．とすれば本稿の知見における「匿名性（没人格性）―人称性（人格性）」という区分は，「ボランティア」の社会理論の修正に寄与するだろう[12]．③事例には，複数の社会理論が交差する諸条件下の実践の具体的な形態やプロセスが現れる．本稿の事例では，「ボランティア」やワークキャンプの社会理論以外に日本社会論が指摘する文化的構造の諸条件が現れており，それらの中で〈贈与のパラドックス〉の対処法が生み出されていた[13]．①と②は社会理論と事例研究との間の理論的サンプリングへと導くが，「生の技法を分析する」ことを考える上で筆者が注目したいのは③である．

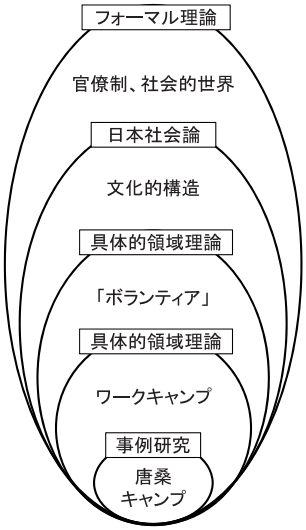

図２　事例研究と社会理論との関係
出典：筆者作成

概して一般性の高い社会理論は，多くの事例に適合しそれらを説明することができるが，個々の事例の特殊性や複雑性を説明することが難しい．したがって，人びとの（一般化可能な形式よりも具体的な内容を指す）「生」は，社会理論よりむしろ事例において現れるものであり，人びとの（相互）行為と

社会的世界に着目して把握することができる．また人びとの「技法」は，事例に表れる複数の社会理論の「特殊な結びつき」（Strauss1993：211）の中で実践される．これは実践の形式であることから，当事者のみならず類似の状況に置かれた人びとにとっても――諸条件が違うため全く同一の技法とはならないが――少なくとも理解可能であり，程度の差はあれ自らの実践に応用可能な形で分析することができる[14]．つまり本稿でいう「生の技法の分析」とは，事例に特有の諸条件下における人びとの想いや感情やモラルや行動を含めた生きられた経験を，類似の主題を抱える他者に理解・応用可能な実践の形式で提示することなのだ．

唐桑キャンプの例でいうと，キャンパーたちは，ときに協働しつつも〈派遣型ボランティア活動〉に対し違和感を覚え，また「ボランティア」という言葉を嫌いながら，楽しくワークキャンプを実践していた．その活動を通じてキャンパーたちは，唐桑の人びとに「気が楽になればいい」（MA），「きっと何か心に残る」（SR）という想いを抱きつつ，〈つながり〉の形成により長幼の序に生きる彼ら／彼女らを元気づけた．唐桑の人びとはキャンパーたちを「家族のように思っている」（ME）と語り，キャンパーたちは唐桑町を「大切な場」（MA）と捉えていた．キャンパーたちは，唐桑の人びとから〈おもてなし〉や「感謝」（SR）を受けて「ありがたい」（LE）と思いつつも，「自己満足だったのかな」（MA）という「葛藤」（MA）を抱えた（〈贈与のパラドックス〉の顕在化）．そうした中でキャンパーたちは，「奥州独特の閉鎖的風土」と呼ばれる共同体的特質を尊重しながら，「居させてもらっている」（LD）という負債感覚と唐桑の人びとへの「敬意」（LD）を抱く実践の形式（「被災者－外部者」関係における克服）と，「親密になる」（LE）ことを重視し「問題があれば謝りに行く」（LB）という実践の形式（〈つながり〉による無化）を生み出した．この実践知は，他のワークキャンプのみならず，現地の人びとと人称的な関係を形成するボランティア活動にとっても有用となるだろう．

方法論的に言い換えるならば，「技法」は分析による他者の生に結びつく道具的知識であり，「生」は記述によるそれを使う人びとの物語である[15]．人びとの物語や事例の諸条件から切り離した一般的な道具とするのではなく（そうすれば生や事例は道具にとって不純物となる），他者の生と切り離された特異な物語とするのでもなく（そうすれば物語は読み手に無関連の遠い異世界となる），事例に特有の諸条件と生の物語の中で実践される技法を分析すること[16]．これが事例において「生の技法を分析する」ことの意義である[17]．

【付記】

本稿は，K. Yamaguchi, 2014, “An Intimate Interpersonal Ties Approach to Earthquake Disaster Volunteer Activities”, *Sociology in the Post-Disaster Society*, “Reconstruction from the Great East Japan Earthquake” (JSPS 24243057), pp.33-49を，2015年度立命館大学生存学研究センタープロジェクト「現代社会におけるエスノグラフィ方法論―「生の技法」記述への探求」に合わせて加筆，修正したものである．

注

(1)　グラウンデッド・セオリーには具体的領域理論とフォーマル理論があるが，本稿はその双方を社会理論に含めている．

(2)　仁平（2011）の知見は，日本社会のボランティアの具体的領域理論といえる．ただし彼が理論的中心に据えた〈贈与のパラドックス〉はフォーマル理論に近い．

(3)　そのうち累計で１か月以上の長期滞在者が17名，２週間以上１か月未満の中期滞在者が12名，２週間未満の短期滞在者が158名，現地在住の参加者が14名，不明が５名であった．性別の比率はおよそ男性が６割で女性が４割であり，20歳代までの若者が参加者全体の７割強を占めていた．中期・長期滞在者のほとんどが若者であり，また参加者の多くがワークキャンプの経験を有していた（山口2015a：144-145）．

（4）　ただし分析的に言って，人称的な関係に必ず親密性が伴うわけではないし（例えば初対面での相互行為），親密性は友好的な関係を必ず意味するわけでもない（親しいがゆえに相手を憎み嫌う場合）．実際に唐桑キャンプでは，人称的で親密な〈つながり〉の中でキャンパー同士が喧嘩になりそうな口論や意見の衝突を行うこともあった（山口2015b：183）．

（5）　グラウンデッド・セオリー法とは，手順を厳格化した一種の「レシピ」のようなものではなく，研究目的に合わせて修正可能な方法論である（Strauss & Corbin 1998=2004：iii，3-4）．またそれは，「単一の事例でも一般的な概念的カテゴリーないし特性を示すことはできる」（Glaser & Strauss 1967：30=1996：41）ものである．したがって本稿の修正された方法は，グラウンデッド・セオリー法の正当性を有する．

（6）　ただしその飽和は，調査期間（2012年１-９月）とインタビュー了承者の社会的属性と人数（キャンプ参加者37名）により制約されている．

（7）　ストラウス＆コービン（2008=2012：204）において，具体的領域理論の構築は一つの事例からでも可能である．ただし本稿は，包括的で統合された具体的領域理論の提示ではなく，既存の具体的領域理論と関連させつつ事例研究からの理論化を行うものである．

（8）　唐桑キャンプの調査対象者は，2012年当時において被災者への調査を控えるという倫理的配慮から，キャンパーに限定されている（山口2015a：139）．そのため本研究では，キャンパーの語りに表れる限りにおいて，現地の人びとの唐桑キャンプへの評価を考察対象とした．そうすると，唐桑キャンプに対する現地の人びとの直接的な評価が含まれないため事例評価が偏っており，事例研究の妥当性を有していないとの疑義がでるかもしれない．しかし本研究の知見は，事例外在的な基準による「典型」や「成功」といった代表性の評価を事例に下しておらず，事例に内在する諸シンボルの検討からワークキャンプや「ボランティア」の理論化を図るものであるため，妥当である．

（9）　しかしこの「楽しい雰囲気」と〈つながり〉を重視した活動形態には，いくつかの問題点があった．第一に「楽しさ」が，被災により傷ついた唐桑の人びとのエンパワーメントに必ず寄与するとは限らない点である．第二に，キャンパーが，唐桑キャンプの目的を忘却し「楽しさ」を目的とする危険性である．第三に，〈つながり〉のない唐桑の人びとに対する，キャンパーの想像力の欠如が生じる危険性である（山口2015b：186，200-201）．

（10）　実際に，キャンパーたちは唐桑の人びとと〈つながり〉を形成するまで，彼ら／彼女らから「ボランティア」と呼ばれていた（山口2015a：147）．

（11）　統計的一般化と理論的一般化との違いは，Schwandt（2007=2009：6-8）を参照．

（12）　仁平（2011）は，「ボランティア」の社会理論の構築において「贈与と互酬性」という概念を基軸に据えている．そのため仁平（2011）は，人称的な関係におけるケア倫理に基づく活動を〈贈与のパラドックス〉の範疇に位置づけ，「〈贈与〉から〈交換〉へ」という変遷の内に「ボランティア」言説の終焉をみた．しかし，仁平のいうNPOや企業の社会的責任などの〈交換〉領域は，経済・経営合理的であり官僚制的組織を伴いがちなことから，本稿でみたような人称的な関係における互酬性に適さないだろう．筆者は，彼の理論に「匿名性（没人格性）―人称性（人格性）」の区分を組み込むことで，互酬性に基づく「ボランティア」の社会理論を彼のようにシニシズムに陥らずに構築することができると考える．

（13）　仁平は「［贈与の］パラドックスを回避するための具体的なプログラムは時代や立場により異なる」（仁平2011：14）とその多様性を指摘しつつも，言説としての「ボランティア」の統合された理論構築を志向した．本稿はそれと異なり，〈贈与のパラドックス〉の対処法のより具体的で多様な実践形式の解明を志向するものである．

（14） この点は，グレイザー＆ストラウス（1967=1996：339）におけるグラウンデッド・セオリーの４つの評価基準（状況適合性，理解可能性，一般性，適用可能性）を，事例研究に合わせて筆者なりに解釈し直したものである．

（15） ストラウス＆コービン（1998=2004：25-27，2008=2012：73-79）によれば，記述とは読み手に場面や感情やイメージを想起させたり内容の信頼性を伝えたりする物語の作成であり，分析とは理論化に向けた諸概念の生成と発展と検証のプロセスである．また前者は後者の基礎をなすものである．

（16） ここでいう「生」と「技法」は，水野（2000：8-10）の区分に基づけば《現象把握》型と《モデル構築》型に対応するだろう．本稿は，グラウンデッド・セオリー法から着想を得て事例を分析する点で，水野（2000）の「事例媒介的アプローチ」に近い．しかし本稿は，ストラウスの方法のみならず分析視角も採用する点で彼のアプローチと異なる．この相違の検討は今後の課題としたい．

（17） なお筆者は，こうした事例水準での理論産出の研究を重ねることで，諸事例を包括的に説明する具体的領域理論を構築する道筋を考えている．例えば看護師－患者関係のような社会的にパターン化された主題の場合，事例間の理論的サンプリングは比較的容易である．しかし，筆者が主な研究対象とする日本社会の「共生」実践の場合，「共生」が曖昧な概念であるために諸事例の特徴の相違が大きく，事例間の理論的サンプリングが容易ではない．

文　献

阿部謹也，2001，『学問と「世間」』岩波新書．

新雅史，2011，「災害ボランティア活動の『成熟』とは何か」，遠藤薫編『大震災後の社会学』講談社，193-235頁．

Glaser, B.G., and A. L. Strauss, 1967, *The Discovery of Grounded Theory*, Aldine Publishing Company（=1996，後藤隆・大出春江・水野節夫訳，『データ対話型理論の発見』新曜社）．

日下渉，2015，「『祝祭』の共同性」，西尾雄志・日下渉・山口健一著『承認欲望の社会変革』京都大学学術出版会，105-135頁．

水野節夫，2000，『事例分析への挑戦』東信堂．

————，2005，「GT法の分析的ポテンシャル」『社会志林』52巻３号，47-75頁．

中根千枝，1967，『タテ社会の人間関係』講談社現代新書．

仁平典宏，2011，『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会．

西尾雄志・日下渉・山口健一，2015，『承認欲望の社会変革』京都大学学術出版会．

西尾雄志，2015，「公と私の円環運動」，西尾雄志・日下渉・山口健一著『承認欲望の社会変革』京都大学学術出版会，19-43頁．

佐藤慶幸，1994，『アソシエーションの社会学』早稲田大学出版部．

Strauss, A.L., 1993, *Continual Permutations of Action*, Aldine de Gruyter.

————, and J. Corbin, 1998, B*asics of Qualitative Research 2nd edition,* Sage（＝2004，操華子・森岡崇訳，『質的研究の基礎　第２版』医学書院）．

————, J. Corbin, 2008, *Basics of Qualitative Research 3rd edition,* Sage（=2012，操華子・森岡崇訳，『質的研究の基礎　第３版』医学書院）．

Schwandt, T.A., 2007, *The Sage Dictionary of Qualitative Inquiry 3rd edition,* Sage（=2009，伊藤勇・徳川直人・内田健監訳，『質的探究用語辞典』北大路書房）．

山口健一，2015a，「〈つながり〉の現地変革としてのワークキャンプ」，西尾雄志・日下渉・山口健一著『承認欲望の社会変革』京都大学学術出版会，137-168頁．

————，2015b，「ワークキャンプにおける〈公共的な親密圏〉形成」，西尾雄志・日下渉・山口健一著『承認欲望の社会変革』京都大学学術出版会，169-202頁．

“Analyzing the Art of Life” between a Case Study and Social Theories – A Study on Work Camp and Volunteer Activity –

Ken’ichi YAMAGUCHI

This study considers two aspects of the Karakuwa Camp: the significance of analyzing the art of life through a case study and social theories and the difference between a work camp and volunteer activities. The study applies Anselm Strauss’ interactionism and his grounded theory approach.

The work camp observed at Karakuwa Camp is one of the volunteer activities after “the end of volunteerism” in the mainstream Japanese civil society. However, it does not have a bureaucratic organizational structure and the immediate “paradox of donation” that engenders criticisms of hypocrisy or complacency, but it copes with this problem by forming interpersonal ties between work campers and local people as well as utilizing the cultural habits of the local community.

The case study reveals that the “lives” of people are well grasped in the empirical world by focusing on interaction and the social world; in addition, the “arts” of people are practiced through the specific connections among social theories. Thus, a possible significance of analyzing the art of life in a case study is to practically present the narratives of the local people’s lived experiences so that others in similar situations can understand or apply the inherent lessons.

Keywords : volunteer activity, work camp, art of life, grounded theory approach, interactionism

DOI : 10.15096 / UrbanManagement.0903